

ネギの栽培



一 作付様式と市場性

ネギはわが国では古くから栽培されている作物で、全国いたる所で作られ、各府県の栽培面積は平均している。この栽培を大別すると土寄せして所謂「白根」をつくる「根深ネギ栽培」と、土寄せを行わずに葉の部分も利用する「葉ネギ栽培」とに分け

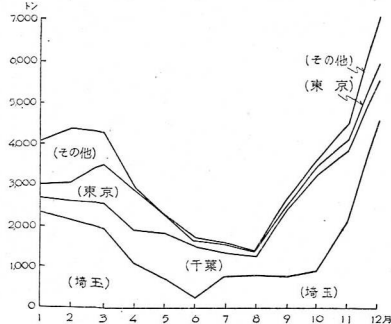
られる。このほか株分けによる「株ネギ栽培」が夏の端境期用に出回り、また菜味やサラダ用の「小ネギ栽培」が小規模ながら周年行なわれている。これらの作型を簡単に表で示すと第一表のとおりである。

このようにネギは周年栽培されるけれども主な需要期は十月から三月までで、特に十二月は平月の倍も出回る。一例として東京

北海道大学農学部園芸学教室

八 鍬 利 郎

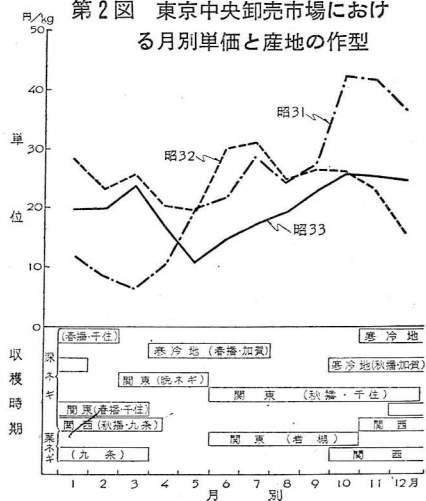
第1図 東京中央卸売市場における月別産地別の入荷量 (昭32)



市場の月別入荷量と平均価格とを示すと第一、二図のとおりで、六月～八月の三ヵ月が入荷量最も少なく、十一月から三月までの入荷量が多い。産地をみると、埼玉が全入荷量の半分を占め、千葉が三割、東京が一分を押しきっている。価格はタマネギのようにほぼ一定した形はとらず、そのときどきの需要と入荷量の多少によってきまるので季節的な差は比較的少なく、年による変動が大きい。出荷の少なくなる夏季に特に高価を示さないのはネギの需要が冬季に集中する季節性によるもので、秋の需要期に入る十月は毎年高値になる傾向がある。その後は入荷がグンと多くなるので値は下り、暑い時期は需要が少ないので値は不安定となり、前に述べたように年による差が大きく現われる。

冬の間は神奈川をはじめ暖地から北海道へ長距離輸送が行なわれている。

第2図 東京中央卸売市場における月別単価と産地の作型



二 品 種

ネギは地方ごとに長年作られ、それぞれに親しまれてきた品種の分化が進んでいるが、熊沢氏らはこれらを第二表のように分類している。寒地には、冬の間地上部が枯れて休眠する夏ネギ型の加賀群やヤグラネギ群が作られ、暖地には耐寒性が強く冬の間も生長を続ける冬ネギ型の九条群が土着し、関東や中部地方には中間型の千住群が作られている。次にこれらについて簡単に説明しよう。

(イ) ヤグラネギ 花茎を出すのが花はほとんど着けず、花茎の先に珠芽をつけ、これがヤグラ(槽)状に二段～三段に及ぶのでこの名がある(写真参照)。種子は出来ないので、珠芽を植えるか株分けして繁殖する。分けつは多い方で、葉は細く濃緑である。寒地で自家用の夏ネギとして利用する程度で分布地域は限られている。

(ロ) 下仁田 栽培は群馬県下の一部に限

第2表 ネギの品種分類 (熊沢・阿部両氏)

品種群	代表品種	類似品種
ヤグラネギ		
加賀	下仁田 加賀 岩槻 坊主不知	下仁田(長型) 松本一本, 札幌一本, 秋田太, 金沢 会津太, 藤崎, 青森地ネギ
千住	黒柄 合柄 赤柄	牛角, 黒昇 深谷, 宮尾, 矢切, 砂村, 石倉, 伯州 王喜, 遠州
九条	越九条 九条 三三	黒柄, 合柄, 赤柄 紺ネギ 浅黄

第1表 ネギの作型 (秋谷・藤枝氏)

作型		播種期	収穫期	品種
根深ネギ栽培	寒高冷地	4.旬上~5.旬上 4.上~5.上 8.下~9.上	11~12月 4~7 10~1	千住, 加賀 加賀 加賀
	関東	9.上~9.下 9.上~9.下 9.中~9.下 3.上~3.下	3~5 6~12 12~3	晩ネギ 千住 千住, 加賀
	関西	9.下~10.中	11~4	九条
葉ネギ栽培	関東	3~4 3~6 9~10	6~10 10~3 10~3	岩槻 九条 九条
	関西	3~4 3~6 9~10	6~10 10~3 10~3	岩槻 九条 九条
	関東	8~9* 3~4*	5~7 8~11	三州 弘法
小ネギ栽培	関西	2~11 1~12	周年 周年	九条 充実種子

* 株分け

海道で広く栽培されている。関東地方では冬に入ると地上部が枯れ収量が急に減るし荷姿が悪くなるので冬ネギとしては実用にならないが、積雪前に十分に生育させ、冬季間貯蔵して使うのに向いている。また寒地では越冬後早春に出す品種としても重要である。

白根の伸びはあまりよい方ではないが、軟白部の色とつやは優れている。北海道で大量に作られている札幌一本太はこれから出たものといわれている。

(二) 岩槻 埼玉県産のもの

で、白根はあまり長い方でない

られ、典型的な短太形である。秋まき、春仮植、七月末から八月上旬定植で年末に収穫されるが、収量は余り多くなく、一〇坪当り二坪内外である。質は堅い方で、煮えくずれせず、やわらかな風味がある。

(三) 加賀 寒地向きの品種で北陸、東北、北海道で広く栽培されている。関東地方では珍しい葉ネギ用品種である。全体に小柄で葉の色は濃い。七~八月に出荷するネギとして一部で作られている。

(四) 坊主しらす 葉の色が濃く、全くとう立ちせず、分けつの多い品種である。種子がとれないので一部の株を残しておき、八月下旬に株分けして繁殖し一般のネギがとう立ちする四~六月に出荷する。

(五) 千住黒柄 千住群に属するものは中間地帯に分布し、冬の寒さを受けながらも徐々に生育を続け、成熟して極めて質のよい軟白部ができる。

黒柄は千住ネギの中では葉の色が最も濃いのでこの名がある。耐暑性が強く、夏の間もよく伸長するので、夏から秋にかけて出荷するのに使われる。分けつはほとんどせず、白根は太く短かい方で、長さ三〇~

三五秀位である。質は緻密で食味がよく、市場で歓迎されているが、収量はやや少ない。

(六) 千住赤柄 緑葉も白根も黒柄より細長く、葉の色はややうすく、しまりはよくない。耐寒性が強く、冬でも発育するので春まき、冬どり栽培に使われる。分けつは二~三本で収量が多いが品質があまりよくないので最近栽培が減ってきている。

(七) 千住合柄 黒柄と赤柄の中間の性質をもち、品質がよく、白根も長くて収量もある。土壌の適応性も広いので千住ネギの中で最も栽培面積が広い。

群馬県の「石倉」は耐病性と耐寒性が強く、分けつせず太くなり、収量が多いので各地に広まっている。埼玉北部で作られている「深谷」もこれと似ている。「砂村」は東京都砂町で採種されていたもので、二~三本に分けつするやや暖地向きの合柄である。

(八) 越津 愛知を中心に東海地方に栽培の多い品種で、葉ネギと根深ネギの中間に当たり、葉もやわらかく、白根もよく伸びて軟白に適する。葉の色は系統によって濃淡があり、濃いものは分けつが少なく、白根が太くて輸送に適し、淡いものは分けつが多く葉ネギの性格が強く、都市近郊の栽培に適する。

(九) 九条 葉ネギの代表品種で一般に分けつが多く、白根は細くて伸びも悪いが、一部深ネギ栽培に用いられるものもある。九条太は黒種とも呼ばれ、九条の中では分けつが少なく、白根が太く、耐寒性が強



ヤグラネギ

く、白根は太く短かい方で、長さ三〇~三五秀位である。質は緻密で食味がよく、市場で歓迎されているが、収量はやや少ない。

(六) 千住赤柄 緑葉も白根も黒柄より細長く、葉の色はややうすく、しまりはよくない。耐寒性が強く、冬でも発育するので春まき、冬どり栽培に使われる。分けつは二~三本で収量が多いが品質があまりよくないので最近栽培が減ってきている。

(七) 千住合柄 黒柄と赤柄の中間の性質をもち、品質がよく、白根も長くて収量もある。土壌の適応性も広いので千住ネギの中で最も栽培面積が広い。

群馬県の「石倉」は耐病性と耐寒性が強く、分けつせず太くなり、収量が多いので各地に広まっている。埼玉北部で作られている「深谷」もこれと似ている。「砂村」は東京都砂町で採種されていたもので、二~三本に分けつするやや暖地向きの合柄である。

(八) 越津 愛知を中心に東海地方に栽培の多い品種で、葉ネギと根深ネギの中間に当たり、葉もやわらかく、白根もよく伸びて軟白に適する。葉の色は系統によって濃淡があり、濃いものは分けつが少なく、白根が太くて輸送に適し、淡いものは分けつが多く葉ネギの性格が強く、都市近郊の栽培に適する。

(九) 九条 葉ネギの代表品種で一般に分けつが多く、白根は細くて伸びも悪いが、一部深ネギ栽培に用いられるものもある。九条太は黒種とも呼ばれ、九条の中では分けつが少なく、白根が太く、耐寒性が強

く、白根は太く短かい方で、長さ三〇~三五秀位である。質は緻密で食味がよく、市場で歓迎されているが、収量はやや少ない。

(六) 千住赤柄 緑葉も白根も黒柄より細長く、葉の色はややうすく、しまりはよくない。耐寒性が強く、冬でも発育するので春まき、冬どり栽培に使われる。分けつは二~三本で収量が多いが品質があまりよくないので最近栽培が減ってきている。

(七) 千住合柄 黒柄と赤柄の中間の性質をもち、品質がよく、白根も長くて収量もある。土壌の適応性も広いので千住ネギの中で最も栽培面積が広い。

群馬県の「石倉」は耐病性と耐寒性が強く、分けつせず太くなり、収量が多いので各地に広まっている。埼玉北部で作られている「深谷」もこれと似ている。「砂村」は東京都砂町で採種されていたもので、二~三本に分けつするやや暖地向きの合柄である。

(八) 越津 愛知を中心に東海地方に栽培の多い品種で、葉ネギと根深ネギの中間に当たり、葉もやわらかく、白根もよく伸びて軟白に適する。葉の色は系統によって濃淡があり、濃いものは分けつが少なく、白根が太くて輸送に適し、淡いものは分けつが多く葉ネギの性格が強く、都市近郊の栽培に適する。

(九) 九条 葉ネギの代表品種で一般に分けつが多く、白根は細くて伸びも悪いが、一部深ネギ栽培に用いられるものもある。九条太は黒種とも呼ばれ、九条の中では分けつが少なく、白根が太く、耐寒性が強

い。九条細は浅黄種ともいわれ、葉は淡緑色で分けつ多く、白根が細く耐寒性はやや弱い。とうだちが早いから、秋から年内収穫用に使っている。西日本では専らこの品種が作られ、小ネギとしても用いられている。

(ハ) 三州 九条系と思われ、不抽臺系である。分けつが多く一〇本以上に達し、夏には休眠する。草丈低く、株ネギであるが葉の質は軟らかく春の出荷用になる。

三 栽 培 法

1 育 苗

苗床には肥沃な壤土か砂壤土がよく、灌水の便利な場所を選ぶ。床土には一〇平方呎当り石灰一キを散布して耕起し、完熟堆肥四〇キ、下肥二〇キ、過石五〇〇キを施して全層に切りまぜる。肥やけも起しやすいいのでこれらの肥料は早めに施しておく。

種子を播く時期は春秋の二回あるが、秋播きではおくれると根の発達しないうちに低温にあつて寒害をうけやすいし、早過ぎると翌春になってとう立ちが多くなる。また春播きもおくれると生育が非常に劣るので各地域の播種適期を逃さぬように注意しなければならない(第一表参照)。なお、冬まきしてトンネル育苗を行い、抽臺しない良苗を作って早出しするのも面白い栽培法である。

一〇呎当り播種量は〇・六〜〇・八畧で、床面積は秋播育苗では播種床〇・六〜〇・七呎、仮植床三呎を要し、仮植しない春播き育苗では一・四呎を要する。栽培型がいろいろあるがその代表的なものについて育苗基準を示すと第三表のとおりである。

第3表 ネギの各種育苗基準

播種期	地域(品種)	播種床	播種法	仮植方法			備 考
				条間	株間	畧当数	
秋 播	関東(千住)	1.2 畧幅 平床	9 畧間隔条播	センテ45	センテ9	1	深ネギ用 葉ネギ用
	九州(九条)	1.2 畧幅 平床	12 畧間隔条播	25	9	2	
	関西(九条)	1.5 畧幅 平床	散 播	35	12~15	3~5	
春 播	各 地	60 畧間隔に20~30 畧幅の播条をつくり散播	行なわない				
冬 播	(トンネル育苗)	1.0~1.5 畧床	12~15 畧間隔条播	秋播に準ずる			はに ネ中 ト月 3開 放す

い。あるがその代表的なものについて育苗基準を示すと第三表のとおりである。播種後は敷藁をしてやるとよい。発芽すると敷藁をとり除き、密生部を間引き、ときおり追肥として薄い尿素液(〇・一〜〇・二%)をかける。

2 整 地

畠は肥沃でPH七(中性)に近いところが多い。乾燥をきらうから乾きやすいところ

は避ける。また排水のよいことも必要である。

根深ネギは夏植えるので、東西の方向に溝を切り、掘り上げる土はうねの南側に盛り、苗をみぞの南側に植えて直射光線を受け活着を促すが普通である。

畦幅は土寄せの関係から崩れやすい砂質土では一〇〜一二呎、殖質土は七五呎を基準とするが、越年して二月〜三月収穫の栽培ではやや広めにする。植溝は一五呎幅、真直に深さ一五〜二〇呎掘る。まっすぐなネギを作るためには、どうしても垂直な溝を作る必要がある、そのためにはかなりの労力をかけている。前作が終わったあと、耕起すると土は軟らかくなるが溝に土がくずれ落ちるので、むしろ耕やさず、石灰を散布して整地し、表面を平らにならす程度にする。また植溝を掘るときには、最初ごく浅く削るようにして進み、印のついた所で、数回に分けてくわを入れて両側の土がくずれないように、垂直に掘り下げるとよい。勢いこんでくわを打ち込んで土を起こすと、溝が広くなり垂直な溝ができない。

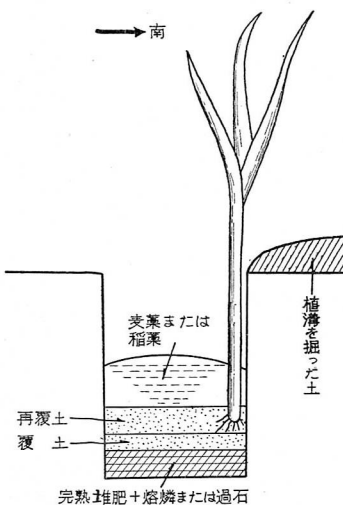
葉ネギ栽培では一・二呎の平畦を作り、四条の浅い作溝を掘って植える。

3 定 植

定植期は東北・北海道では七月、関東以西は六〜八月である。

苗は苗床の端から三本くわで順次掘りとり、大中小に選

第3図 根深ネギの植付けかた



別して植える。大小の苗を混植すると生育が揃わず、土寄せのときにも高さがまちまちになって都合が悪い。

根深ネギの植付けは第三図のように、溝の底に元肥を入れ、その上に少し土をかけ、たところへ、苗を一本ずつ真直ぐに立て、溝の南側にびったりとつけるようにして三呎位覆土し、軽い土の場合は、その上を踏みつけて倒れないようにする。植えつけ期が盛夏に当り、土の湿りの少ない場合は、溝を掘ったらずぐ植えるようにすると、まだ湿った土で根を覆うことができるので活着がよい。また、灌水ができる場合には、定植のときに灌水すると活着を促し、その後の生育を進めるのに役立つ。溝に植えるからといって、植える時から厚く土をかけ、苗を埋めるようにすると、その後の生育がおさえられて結果がよくない。第三図に示すように、薄く覆土した上にわらや粗い堆肥や刈草、海藻などを敷くと、①苗が倒れない。②根元が乾かない。③土を盛ったときに通気がよくなるという三つの目的に役立つ。

株間は根深ネギでは六〜九莖にして一本植え、葉ネギでは一五莖間隔に二〜三本植えとする。

葉ネギ栽培では、苗とり後七〜一〇日間苗を乾燥してから定植する習慣があり、こうすると分けつを促し増収になると信じられている地方がある。これに関する高島氏の試験結果によると、分けつはやや増加するが、定植直後の生育が遅れるので、早期収穫の場合には収量がやや減る。ただ乾燥している間に不良苗が腐るので自然に苗の選別ができる。またとう立ちが乾燥によって影響されないことが明らかにされた。これらの結果からみると、苗の乾燥は、収量や品質の向上のためには役立つが、苗の取扱いや定植のときの作業上の便利さなどの点からは意味のないことでもないと考えられる。また葉ネギの定植の時、苗を一五莖くらいに切りつめて植えることがある。高島氏によると、これも切らないときに比べると、分けつは少し増加するが、収量はやや減ったという。氏は、この作業の利点を、葉についているベト病菌、アカサビ病菌などの除去と、定植作業を容易にする二点にあると説明している。

4 施肥

ネギは一〇坪当り四〜五斗の収量が得られるが、肥料もそれに応じて多量に施す必要がある。またネギは溝に定植する関係で元肥を施す場所が狭く、また土寄せをした後には根がだんだん上に向かって伸びるので、肥料を施す位置も時期によって変える方が合理的である。つまり、元肥は割合少

量にとどめ、追肥は数回に分けて施すが、毎回十分な量を根の部分に施して肥切れしないように努めることが大切である。

チソンは収量に直接響くので、最も重きをおかれ、三要素の中で一番多く、成分量にして一〇坪当り二〇〜三五キの範囲で施されているが、肥沃地は少なく、砂地のよりに流亡しやすい所では多くしている。チソンだけでは白根のしまりが悪く、質のよいものがないのでリンサン、カリも十分に施さなければならぬ。リンサンは一〇〜二五キ、カリは一五〜三〇キぐらいが標準とされている。

第4表 ネギの施肥例
(イ) 有機質肥料を主体とし標準量に近い例

種類	総量	元肥	追肥			成分		
			1	2	3	チソ	リンサン	カリ
堆肥	キロ 1,200	キロ 1,200	キロ —	キロ —	キロ —	キロ 6.0	キロ 3.0	キロ 6.0
粕糞	100	—	50	50	—	5.1	2.2	1.5
鶏糞	200	200	—	—	—	4.0	4.0	2.0
草木灰	60	60	—	—	—	—	0.7	3.3
草下肥	2,000	300	500	600	600	10.4	2.6	5.4
計						25.5	12.5	18.2

(ロ) 化学肥料も用い、かなり多肥栽培の例

種類	総量	元肥	追肥			成分		
			1	2	3	チソ	リンサン	カリ
堆肥	キロ 3,000	キロ 2,000	キロ 1,000	キロ —	キロ —	キロ 15.0	キロ 10.0	キロ 15.0
尿素	33	—	8	8	17	14.9	—	—
磷肥	120	70	50	—	—	—	24.0	—
加里	43	—	10	10	23	—	—	25.8
下肥	2,000	—	—	1,000	1,000	10.4	2.6	5.4
計						40.3	36.6	46.2

施肥例を示すと第四表のとおりであるが、ネギは生食する場合も多いので、追肥には下肥をできるだけ避けたいものである。

5 土寄せ

土寄せは軟白部(白根)を伸ばし、品質を向上させる重要な作業であるが、いつ始め、何回に分けて行なうかによって、生育、収量、品質に差ができる。第五表に示すようにあまり早くから土を寄せると、生育がおさえられて、収量が少なく、おそくすれば収量は増すが、一時に厚くかけるため品質が落ちる。また度重ねて土寄せをすることは

は労力がかかる。結局、これらの点からみて三回に分けて行なうのが最もよいことになる。定植後三〇日〜四〇日たつと苗はしっかりと根をおろし、新しい葉が伸び始める。

第5表 土寄せ回数とネギの収量、発育との関係 (渋谷氏)

品種	土寄せ回数	反当収量	項目			全長	軟白部長	軟白部径	収量割合
			地上部重	軟白部重	葉重				
下仁田	1	411	88.0	53.8	34.7	48.9	14.6	2.8	101
	2	444	97.0	58.8	38.2	53.5	14.7	2.9	110
	3	405	89.4	57.4	31.9	50.2	16.2	2.7	100
	4	387	86.0	56.3	29.6	51.3	15.6	2.5	91
千住	1	594	84.5	58.5	26.9	66.6	26.9	2.5	99
	2	621	102.8	68.0	34.8	73.9	26.1	2.5	103
	3	602	85.4	60.7	24.7	71.6	29.6	2.3	100
	4	513	76.0	52.2	23.8	60.0	30.8	2.2	85

土寄せは最後を1月上旬とし、回数重なる区は1ヵ月ずつさかのぼって早くから行なった。

て見違えるように元気になる。この時期が来るのを待って第一回の土寄せを行なう。第一回は盛り上げた土の一部を削って溝に入れ、葉鞘(白根になる部分)の半分くらいを埋める(第四図)。第二回は、畦の中央に溝を切り、畦の肩に土を盛るようにする。かける土の厚さは葉の分かれめまでが限度で、これ以上かけると生育がおさえられる。畦の肩のほうはやや高いくらいにしておく。この土が固まり、最後の土寄せをした場合に、その上によく土が乗り、高く十分盛り上げることができる(第四図)。

